

新聞に親しみ、自分の興味・関心に合わせて 進んで活用しようとする子を目指して

神戸市立若草小学校 校長 徳山 浩一
教諭 酒井 尚美

1. はじめに

本校は、NIE実践指定校として新聞を活用した学習の研究を始めて2年目になる。昨年度は5年生中心の取組であったが、今年度は2社の子ども新聞を選び、主に4年生以上を対象とした全校的な取り組みを行った。また本校は、神戸市教育委員会学校経営支援課「ICT活用」重点推進校の指定も受けており、ICTを活用した授業づくりをテーマに研究を行っている。その取り組みの一つとして、4年生以上の児童全員が新聞作成アプリのIDを取得し、新しいツールとして活用した。校外学習のまとめとしての新聞や国語科の単元学習の中で作成する新聞など、各学年に応じて効果的にアプリを活用するなどの新しい試みも行った。「新聞を読む」ことと「新聞をつくる」ことの関連指導が、「新聞に親しむ」ための相乗効果となって表れた。

2. 実践の内容

(1) 新聞記事から感じよう・考えよう・学び取ろう

○4年「わかくさトピックス」

子ども新聞の記事の中から担任が選んだ記事を読み、感じたことを書き留める活動を、朝の学習時間や単元学習の中で不定期に取り組んだ。時宜にかなった話題を取り上げることで、ニュースに関心をもつ児童が見られたり、図書館の新聞貸出し（後述）を利用する児童が増えたりするなどの効果があった。



○4年「アップとルーズ」

国語の単元学習に関連付けた活動である。興味をもった新聞の写真を「アップ」と「ルーズ」の観点で選別し、記事を書いた記者の意図を想像し、添える言葉によって記事の印象がどのように変わるのかを考える学習を行った。

この二つの経験が、4年生の後の学習「新聞づくり」に大いに生かされた。

○5年「気になる新聞記事から」

5年生は、まず新聞に興味をもたせるところから学習を始めた。たくさんある新聞の中から目に留まった記事を選び、読んで感じたことや疑問に思ったことを自由に書かせ



てみた。初めは、読めない漢字や難解な語句に立ち止まってしまい読むことに時間がかかったが、慣れると長文の感想を書くことができる児童が見られるようになった。複数の新聞を読み比べることで、見出しやリード文に工夫が凝らされていることにも気づくことができた。社会科見学のまとめ学習として作成した新聞を見ると、見出しのつけ方にこの学習が生かされていることが分かった。また、社会科の「わたしたちの暮らしを支える情報」の単元学習に関連付け、読売新聞社の記者派遣事業を受けた。その授業の中で「見出しやリード文でざっと読む」「興味のあるところだけを読む」などの新たな読み方を知り、新聞に対する抵抗が薄れる機会になった。

(2) 新聞を作ってみよう

○2年「図書館紹介新聞づくり」

近隣の図書館へ見学に出かけ、学校の図書館との違いを新聞にまとめる活動において、実際の新聞紙面を参考にし、レイアウトや見出しの大きさなどについて学習した。

○4年「社会科見学新聞づくり」「クラブ活動紹介新聞づくり」「係紹介新聞づくり」

新聞作成アプリを最も活用する機会の多かった4年生の事後アンケート結果から、授業以外にも各自の係活動をアピールする新聞（学級32人中8名）や自分の良いところを紹介する新聞（学級32人中19名）を自主的に作成する児童が多数いたことがわかった。休み時間などに進んでパソコンルームへ向かう児童も増えた。児童の感想には、「ローマ字打ちが速くなっただけでなく、見出しのつけ方がうまくなってよかった」「いっぱいある写真の中から、必要なものを2つにしぼることができるようになった」「新聞アプリを使ってみて、文を短くまとめることができるようになった」「5年生になってもいろんな新聞をつくりたい」など、成果がうかがえる言葉がたくさんあった。

パソコンによる新聞づくりを学級活動に生かすこともできた。クラス全体に呼びかけたいことを新聞の形にまとめて掲示したいという声上がり、休み時間などを利用して進んで制作する姿が1年を通して見られた。「お楽しみ会のメンバー紹介号」や「誕生日のお祝いメッセージをおくろう」など、子供らしいアイデアいっぱいの新聞がたくさん生まれた。また、自分の名前の由来や長所を記した個人新聞も発行されるようになった。新聞が、児童らにとって生き生きと表現することのできる場となっていたことは間違いない

○5年「社会科見学のまとめ」

国語科「新聞を読もう」の単元では、編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読む学習を行った。同じ出来事について書かれた記事を読み比べ、見出しや写真の違いによって読み手の印象が変わることも学んだ。5年生は、この

ことを踏まえて新聞作成に取り組んだ。

○6年「修学旅行のまとめ」

楽しかった修学旅行の様々なシーンからどの場面を選ぶのか、友達や家族に何を伝えたいのかなどを考えさせるところから始まった新聞づくり。内容や記事の軽重が決まったら、各社の新聞を比較し、より読み手を引きつけ印象に残る伝え方を研究した。各自のメモやパソコン上のデータをもとに、写真を選択し、レイアウトや大見出し・中見出しを工夫しながら楽しんで作成することができた。本物の新聞紙面を模倣することや、作成アプリを使って本格的な新聞形式に仕上げられることにより、意欲を持続することができたように感じた。

【5年記者派遣事業】

読売新聞社総局長を迎えて



【6年修学旅行まとめ】



(3) 図書館で新聞に親しもう

○新聞貸し出し

新しい取り組みとして、図書館で子ども新聞を中心に新聞の貸し出しを行った。

児童が興味を示しそうな記事を学校司書が取り上げて紹介するなどの工夫を重ねるうちに、中学年を中心に貸し出しが増えていった。新聞を借りた児童は気になることや感じたことを進んでカードに書くようになった。それを掲示して広めることによって、貸し出しの数もさらに増えた。平昌五輪の時期には新聞を手にする姿がぐんと増えるなど、児童の関心事が貸し出し数に反映されていた。この様子から図書館との連携によ



↑ 寄贈の子ども英字新聞
← 子ども新聞専用の
展示スペース

によって、貸し出しの数もさらに増えた。平昌五輪の時期には新聞を手にする姿がぐんと増えるなど、児童の関心事が貸し出し数に反映されていた。この様子から図書館との連携によ

り児童のニュースへの関



子ども新聞で新聞に親しんだ児童がさらに新聞を活用できるよう、他の4紙については、図書館の後ろに別のコーナーを設置し、学習資料として手軽に持ち出せるようにした。日付順に並べることで、調べてみたいニュースの記事を見つけることも容易であった。また、教師にとっては教材作りに大変役立つことになった。



子ども新聞の連載記事が好きな児童は欠かさずに借りに来る。ふと手に取った新聞をその場で読みふける姿も見かけられた。

3. 成果と今後の展望

本校では、2年にわたり NIE の実践を進め、得るものが多かった。ただし初めのうちは、長文を読みなれていない児童らは、細かい活字いっぱいの新聞紙面に関心を示すのだろうかという不安があった。教員としても、新聞をどのように活用すれば楽しく意味のある学習ができるのか、などと難しく感じることも多かった。しかし、これまでの NIE の実践報告やガイドブックを参考に児童の興味・関心に応じた活用法を考えるなかで、本校に合う学習活動が少しずつ生み出されてきた。

新聞に親しむ活動から活字に対する抵抗も薄れ、新聞を読むことで社会とのつながりも生まれた。また、自分の新聞を作成することによって、前述の通り児童らは様々な自己の成長を感じ取ることができ、個々の力を伸ばした。まさに、今日求められている主体的に学習に取り組む意欲が培われていったと言える。

NIE 指定校としての活動はこれで終わるが、本校の研修テーマの一つに「国語力の向上」を挙げている。2年間の成果を踏まえ、今後も「読む」「書く」という学習に力を入れた朝の短時間学習や ICT を活用した授業づくりの研究を進めたい。そこにこの2年間の活動を生かすことができると考えている。